渤海小考　その3

——高句麗 I——

森田　豊

《Summary》

A Treaties on Bohai. III
—Kokuryo I —

Yutaka Morita*

People of Bohai was told to be the successor of old Kokuryo. It might be interesting to find out what kind of humanism did the old Kokuryo people show in their history. We will have a short look on it by "History of Tri-adnations in Korea".

* 城西大学教授・研究員

渤海国の祖は，高句麗であると称する。渤海成立までの歴史を，我邦からの故事記載で前二回の小文にて垣間見た。今回は彼地からの故事記載に触れ，如何なる土壌で生まれ出たるかを探ることにしたい。高句麗伝，梁書（「東アジア民族史」，正史東夷伝，井上秀雄他訳注，東洋文庫，平凡社刊）が最初にその出自を記したとされる。曰く，「先祖は東明である。東明は，もと北夷の橐離王の子である。王が外出中に，その侍女が妊娠，王は侍女から天上の大きな鶏卵様の精気が降りて妊娠したと聞かされ囚えておいた。男子が誕生したが疎外し，豚小屋に放置した所，無事に成長し，弓矢に長じた。所が，王には，その子の猛々しさに殺意が生じ，それが王子に感じられる所となり南方の淹滞水まで逃げることとなる。このとき大河を渡るに，魚や鼈が浮き上り並んで橋を作り渡らせたので夫餘に到ることが出来た。そこで王となった。その後，夫餘の一部が別れて高句麗種族となった」と。魏書では，「高句麗の王家は夫餘から分れ出た。自分たちの先祖は朱蒙であると云っている。朱蒙の母は河伯の女であり，夫餘王のために室内に幽閉されていた。太陽の光に照らされ，その太陽の光がどんどん彼女を追いかけて，ついには彼女は懐胎し，卵を生んだ。夫餘王は，その卵を捨てた。所が，その卵を犬，豚，牛，馬が避け，多くの鳥が集まり温めて孵化させようとするのを見て，卵を割ろうとした。所が，その殻さえ破ることが出来なかった。朱蒙の母に戻された卵は，男子を生じた。夫餘の俗語で，朱蒙とは弓矢の上手なことを云う。多くの夫餘の人々が彼を好まないことを知って，朱蒙は烏引，烏達の二人と東南へ向った。途中の大河を魚や鼈の作った橋で渡り，普述水に着いた。ここで納衣，麻衣及び水藻衣を着た三人と会い，紇升骨城に到って高句麗と号した」と述べる。続く隋書にも大略魏書と同様な記述がある。外からの記事に倣った内からの故事記載という事の有無は別にして，同じ民族系の記したものを引かなくてはならない事は同意される所であると考える。「三国史記」（金富軾撰，井上秀雄訳注，東洋文庫，平凡社刊）によると，曰く，「第一代，始祖東明聖王，在位ＢＣ37～ＢＣ19，始祖の東明聖王は，姓を高氏，諱を朱蒙という。扶餘王の解夫婁には子供がなく，山川を祭って世継ぎを授くべく祈った。そのとき乗っていた馬が鯤渕に来て大石を見たとき涙を流した。そこで，大石を動かして見ると，金色で蛙のよう形の子供がいた。金蛙と名付けて養育し王子とした。扶餘王はその後宰相の阿蘭弗の進言で都を迦葉原に移し東扶餘と国号を変えた。扶餘の旧都に天帝の子とする解慕漱が都を開いたが，そのあと，全蛙が王位を継いで扶餘王となった。太白山の南の優渤水で娘にあったとき，その娘は，河神の娘で柳花と云い，天帝の子の解慕漱に熊心山で愛され，その後両親に責められて閉じ込められていると云った。金蛙は，この娘をつれ帰り家の中に閉じ込めた所，日の光が娘を照らし，娠らせ，五升も入る程の大きな

卵を生んだ。如何なる手段でも，割ることの出来なかった，この卵から男子が生まれた。七才となったとき，この男子は知恵がずば抜けて秀れ，自分で弓矢を作り，これで射ると百発百中という腕前であった。弓射の上手であるという朱蒙と名を付け，金蛙の七人の王子と遊ばせていたが，どの王子も朱蒙に及ぶものはなかった。王子の帯素を始め，他の人々の疎外の心を知り，朱蒙の母は朱蒙の国外への脱出を進めた。烏伊，摩離，陜父の三人を連れて出発した朱蒙は，淹淲水で魚や鼈などに橋となって渡らせられて追手をかわして毛屯谷に着いた。そこで麻衣の再思，僧衣の武骨，水藻衣の黙居に会い，この三人に夫々，克，仲室，少室という姓を与えそれぞれに仕事を任せることとした。卒本川の地は，土壌は肥沃で，地形は険しく堅固であったので都とすることとし，沸流川沿に盧を建て，国号を高句麗と称し，高を氏の名とした」と。このとき，朱蒙は二十二才，漢の孝元帝建昭二年，ＢＣ37，新羅の始祖赫居世二十一年甲申の歳であるとされる。

半島の雄，新羅の始祖，赫居世は，同じく「三国史記」によると，「第一代，始祖赫居世居西干，在位ＢＣ57～ＡＤ４，姓は朴，前漢孝宣帝の五鳳元年甲子の年四月丙辰の日に即位し，国号を徐那伐と称し，十三才であった。これ以前に，朝鮮からの移住民が山間に六村に別れ住んでいた辰韓六郎があったが，その突山高墟村の村長の蘇伐公が楊山の麓の蘿井の林の中で跪く馬を見て近よると，突然馬の姿が消え，大きな卵があった。その卵から出生したのが居西干であり，卵が瓢のようであったので朴と称し，王者を意味する居西干を王号とした」と云われる卵と関係する出生を有する。また「赫居世の八年，BC 50，倭人が出兵し，辺境に侵入しようとしたが，始祖には神のような威徳があると聞いて引き返した。同王三十八年，ＢＣ20，馬韓（諸説があるがここでは高句麗をとる）への使者に選ばれた瓠公が，馬韓の王に辰韓と卞韓とは馬韓の属国であるのに近年貢物をしないのは大国に仕える礼に欠けると云はれた。そのとき答えて，我が国は建国以来人間社会の事柄が安定し，天候が順調で穀物倉は充実していて人々は互いに敬い譲り合っている。その為，辰韓の遺民をはじめ，卞韓・楽浪・倭人に至るまで新羅を畏れないものはない。それにもかゝわらず，我が王は謙虚で，私を遣はして国交を開こうとしているので何ら礼に失している訳でなく，礼儀に過ぎたことと云うべきであるなどと云ったので殺されようとした。周りの重臣たちの諫めで王は殺すことを止めて彼の帰国を許したとされる。この瓠公は，もと倭人であって，瓢を腰にさげて海を渡って新羅に来て仕えているものであるが，その相手の馬韓王が翌三十九年に死去した。この年高句麗の始祖東明聖王が死去しているので，この話の馬韓の王は高句麗王であるとする」という下りに，始めて倭が出現する。高句麗では，次いで東明聖王の長男で類利と称する，七稜の石の下にある剣の一部を探し，王の

有する剣の一部と一致することで太子となる事を得た物語を有する主人公が瑠璃明王の名で第二代として即位する。その二年，ＢＣ18，に百済では始祖温祚王が即位する。百済も同様に扶餘であり，高句麗とは同族同系であることが「三国史記」で知らされる。曰く，「鄒牟，別名朱蒙が北扶餘から避難して卒本扶餘についた後，時の扶餘王の二番目の娘を嫁とし，扶餘王を継いだ。その間に二子，沸流と温祚もうけたが，王位は朱蒙の北扶餘にいた頃の子，即ち瑠璃明王が継ぐよう太子となったので，この二子は対立を恐れて烏干，馬黎ら十人の家臣と，多数の百姓（有力者）を従えて南方に旅立つのである。沸流は十人の家臣の意見を聞かず弥鄒忽に居を定めて温祚と別れた。温祚は十人の家臣に助けられて河南の慰礼城に都をおき，国号を十済とした。」その年，沸流が自国の安泰でないことを恥じ悔い死んだことで，その百姓たちが温祚に帰属し，楽しみ従ったことに由来して国号を百済と改めたのである。

このときに半島の歴史を彩る三国が夫々歩みを並び始めることとなったのである。

さて高句麗国であるが，ＢＣ９年に鮮卑を属国とし，元流の扶餘国（東扶餘となって，東海の海浜の迦葉原に都を移しているとされる）との争いも雪に救はれ，国都を尉那巌（吉林省集安県）に移し築城した。このとき王の二十二年（ＡＤ３）である。当時，交渉を有した隣国に，黄龍国，先述の扶餘国，漢は王莽の新，漢と常に争う匈奴，西方に接する梁貊国などがあった。当時，漢の王莽は，高句麗兵を動員して，匈奴を討伐しようとしたが，高句麗人はこの戦いに積極的に協力しようとしなかった。そこで王莽は高句麗を強迫して出兵させたのであるが，彼等は塞から逃亡してしまい，法を犯してその地方を荒した。この高句麗人達を追撃した遼西部の長官の田譚が返り打ちにあって殺されてしまったことの責任を時の漢の高句麗候騶に負わせるという騒ぎとなった。厳尤と云う新の重臣がこの騒ぎを治めるべく，騶に責任を取らせ，大罪を負わせることは高句麗人を更に反乱へと向わせることとなる，又はそれにつれて扶餘も反乱に応じる。そのときの漢は匈奴にさえ勝てないでいる勢力，国力であるので，考えるべきであると上奏したとされる。しかし，王莽は，その厳尤に命じて騶を打たせ（一説に，高句麗の将軍の延丕を打たせ），その首を長安に送らせたと云われる。王莽は高句麗の国王の名称を，この時に下句麗候としたとして布告周知させたので，反乱の高句麗兵達は益々漢の辺境を荒す結果となった。次ぐ第三代大武神王の五年（ＡＤ22），扶餘と併合，次いで九年に蓋馬国を征服し，同年に句茶国の降服を得て領土を大いに拡大した。更に十五年に，王子の好童が沃沮で楽浪王の崔理と出会い，その娘を妻とすることを申し出られた。好童は後に国へ帰り，今度は人を送って彼の妻となるべき崔理の娘に次の様に伝えさせた。もし国の武器庫に潜入して，その中にあ

る敵兵が迫って来ると自然に鳴り出して国の危機を知らせる太鼓や角笛を壊すことができなければ妻として迎えないと。妻となるべき娘は，好童の言葉通り武器庫に入り，太鼓や角笛を良く切れる刀で壊し，そのことを好童に伝えさせた。そこで好童は父の大武神王に楽浪国の襲撃をすゝめ，崔理が敵軍の侵入を知り得ないことで軍備が整えられないことで，突然に楽浪城に迫り込んだ。崔理ははじめて太鼓，角笛の壊されているのを知り娘を殺して降服した。その半年後，好童は王妃の讒言に釈明しようとせず，自分がもし無罪を釈明すれば義母の悪を明らかにし，王に心配をかけるので孝行と云えないと云って刀で自殺した。好童は次妃の子であったが，王は彼を非常に愛していたのであった。王妃の子，王子の解憂が太子となった。この年の末に，後漢に朝貢し，光武帝からの高句麗の王号の復活を得た。後漢の建武八年（ＡＤ32）の事である。太子の解憂は後に第五代王の慕本王となる。所が，この王は日増しに暴虐となり，例えば坐る時は必ず人の上に坐り，寝るときは人を枕に，そしてその枕が動揺すれば容赦なく殺し，家臣で諫言するものがあれば弓で殺すなど惨酷の限りを尽した。王の側近に杜魯という勇者がいた。この側近が，自分も王に殺されるのではないかと心配して泣いているのを見て，ある人が次の様に言った。

一人前の勇士にして大声をあげて泣くとは何事であるか。古人も「自分にやさしくしてくれるものこそ君主であり，自分を虐げるものは仇敵である」と云うではないか。今，王の行いは残虐そのものであり，人々を殺害しており，国民にとり仇敵である。忠臣であるお前こそこれに対処すべきではないか。

この言葉に，杜魯は刀を隠し持って王の前に進み出た。王は例の如く，彼を引き寄せ，その上に坐った。この時，杜魯は王を刀で殺害し国民の仇敵を亡きものとした。この王の後に立つのが，第六代大祖大王で在位94年にも及ぶ国祖王・宮である。高句麗を部族国家から征服国家，古代国家へ飛躍発展成長させた王として歴史の認める所であるとして始祖王的な名称が諡られたと考えられるものである。東沃沮，藻那国，朱那国，後漢の玄菟郡の帰属要求と華麗城攻撃，遼東郡攻撃など征服戦争を在位90年間に行ない領土の拡大を実現した。何代か経て，第十一代東川王十年（ＡＤ236）に，三国志で有名な呉の孫権との関り合いが見られる。呉王の孫権が，使者の胡衛を派遣し，国交を求めて来たのである。これより前八年（ＡＤ234）に魏が使者を派遣して国交を求めて来ており，当然，東川王憂位居は国交樹立していたのである。魏は太祖の曹操が200年頃，後漢の実権を握り始めた頃から事実上国家として始まったと考えられるもでので，形式上では220年に曹操の子丕が後漢最後の献帝から位を譲り受けた頃から始まったと見られ，東方政策はこの国交要求の頃から始まったのである。東川王は呉の使者を止めておいて，時をおいて後この使者の首

を魏に送り同盟を確立したと考えていた。翌十一年（AD237）魏に使者を派遣し，魏の年号の改まったことを祝賀するのであるが，このときが景初元年である。この翌年，魏の太傅の司馬宣王が遼東の雄，公孫淵を討つのである。このとき，東川王は兵を送り魏の援軍として戦はしめた。その翌年が景初三年（239）で，この銘のある銅鏡が我邦から出上して，倭国の起源の色々の論議の題材となるのである。一方，東川王は，242年に遼東へ勢力を延ばし始める。246年，魏は幽州刺史の毋丘倹を派遣し，今度は高句麗を攻撃し始めることとなった。玄菟郡から兵を進めて侵入して来たった魏軍を，沸流河で迎え撃ち，梁貊の谷で再び戦い勝利を一時得たかと見えたが，二ケ月の戦いの末，高句麗の丸都城は攻め落され，殆んど敗北という所を，紐由の策で勢を回復，魏軍が楽浪から撤退することとなり，高句麗は存続する。丸都城の復旧不能との判断から平壌城を築いたと二十一年（247）の記事にあるが，又同時に国民及び宗廟や社稷を移したことと，この平壌はむかし仙人の王倹の屋敷のあった所でまた王の都の王険とも云はれる所であるとの記事があり，このことは「史記」朝鮮伝で衛満が朝鮮を建国したとき王険城に都をおいたとすることと符号するものであると見られるものである。しかし，この平壌城に関しては諸説あり，当時の魏の楽浪郡都があったので，集安地方の或場所に築いたものであるとか，或いは丸都城の建て替えであるとかとも云われる。この翌年の238年，争ってばかりいた新羅と国交を開いたというものがあるが，これは「新羅本紀」二沾解尼師の条にも同様な記事が見られることで半島の二国が友好関係を結んで行こうとした足跡があったことが確実視される。この年，東川王は没する。次の王である中川王が殉死を禁止したにも拘らず，多くの殉死者が王の墓の所で見られ，その屍を覆うために柴を伐って覆せたということから，この墓地のある所が柴原と名付られるに至ったと云われている。故国原王・斯由（釗）の六年（336），晋に朝貢の努力を行ったにもかゝわらず，九年に燕王皝の侵略を受け服従の盟約を行ない，翌年には世子を派遣して朝見までさせ燕の侵略に対応しようとしたが，十二年に至って皝は大軍を率いて南北両道から高句麗攻撃を行ない丸都城を占領し，王母と王妃を捕え帰り，その折，前王の美川王の陵を発き，屍，歴代宝物，男女多数の捕虜などをとり，宮殿を焼き，丸都城を毀してしまったのである。この間逃げ隠れていた故国原王は前王の屍，王母の奪還に大いに努力し，二十五年（355）に至り，人質を納めて又多くの贈物を献上することで王母も無事に帰還とまでこぎつけた上，燕王から征東大将軍，営州刺史として楽浪公に封じられるまでに勢力回復を行なったのであるが，四十一年（371）の百済との戦いで敗れ，流れ矢に当って平壌城で死亡したと伝えられるが，「百済本紀」三蓋鹵王十八年条には，魏に上表して曰く，釗の首を斬って梟にしたという，記事となってお

り，戦に明け暮れ，多くの苦労をした一生を送った王の一人であった。次の王・故国原王の子である小獣林王の時二年（372），秦王の符堅が浮屠（僧のことであるが）の順道を派遣して来て仏像と経文を伝えて来た。この年に王は大学をたて，子弟教育を進め，翌374年に律令を頒布し，次いで秦からの僧阿道を得て，375年に肖門寺を創建，先に来た順道をその寺におき，次いで伊弗蘭寺を創建して，ここに阿道をおいた。これが海東（朝鮮半島）で仏法のはじまりであり，後のわが国への伝来の元である。秦では，泰始四年（268）に晋の泰始律令が行なはれており，その影響と見られる高句麗での律令の頒布であるが，既に百年の隔りがある。又建立の寺院肖門寺は今（高麗時代）の興国寺で，伊弗蘭寺は興福寺であるとされるが，平壌城内の中心部に位置していたものであると云われている。この様に文化的な発展を一段と増した時代の王ではあるが百済とは相変らずの敵対関係であったことが，367年とその翌年の百済との戦いの記事で認められ，一時は平壌城まで百済軍が侵入するという劣勢も見られたが，互角の戦いであったことは，「百済本紀」の近肖古王，近仇首王などの条で見られている。一方秦とは朝貢を行なう関係を維持していた。この王が亡くなり，弟の伊連が384年に王となったのが故国壌王である。燕や百済との抗争は相変らず続いているのであるが，前に国交を持った新羅との関係は継続しており，392年には新羅王の甥の実聖を人質として受け入れている。この実聖は「新羅本紀」によると，その時の新羅王，奈勿尼師今が，高句麗はその国力が強大であるので，伊湌の大西知の子を送って友好関係を維持するとしたものに符号しており，この実聖は人質の役を解かれて401年には新羅に帰国したことが記されている。故国壌王は，仏法を崇信し，福を求めさせ，国社や宗廟などの建立，修理などに励んだ敬仏の王であったとされる人である。この王の子で，次の第十九代王となったのが，倭の関与する高句麗の歴史を示す広開土王碑の名で知られる談徳・国岡上広開土境平安好太王の通称，広開土王である。

「百残新羅旧是属民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百残○○○羅以為臣民」の解釈で大いに世を賑わす王であが，本稿ではこの王を語らず，413年即位の79年の在位の長寿王に飛ぶ。巨連・長寿王は広開土王の長子であり，413年に広開土王の薨去により王位を継いだ。この年からの記事に最も多く見えるものが朝貢外交の記載である。元年の晋への上表文を奉上と赭白馬の献上による安帝からの高句麗王・楽浪（安）郡公の封を受けたのに始まり，十二年の新羅との国文維持の使者への丁重な慰労，十三年から始まる43回の魏への朝貢，その間の466年，魏の文明太后から，魏の顕祖への後宮への王女の供与の命に，自分の娘は既に嫁いでいるとして，弟の娘を送ることで太后の命に従うことの返事を行ったのである。このとき魏はその申出で宜しいとし結納の品まで送らせた。ある人が王にすゝ

めて云うのに，魏はむかし燕と婚姻していたが，まもなく燕を滅ぼした。それは，その婚姻に伴って行った人々が燕の地形をよく知ることが出来たからである。この燕の失敗を考えて，何かよい手段・方法を考え辞退するのが国の為でしょうと。そこで王は娘が死んだと上書したが魏は疑って厳しく責問し，代りに王の一族から選び出してもかまわないとまで云つて来た。王はその申立に従って人選をしようと返事をしたが，偶然，顕祖が死亡したのでこの話は中止となり，事なきを得た。このこと幸運にも可能性のある国内偵察の危機を避けることが出来たのである。「魏書」高句麗伝にもその記事があるが，如何に友好を保持し，国を守るかを見せられるエピソードである。又，それ以前，魏の世祖から435年に都督遼海諸軍事・征東将軍・領護東夷中郎将・遼東郡開国公・高句麗王に任命されていたのであるが，491年薨去に際し，魏の孝文帝から王は車騎大将軍・太傅・遼東郡開国公・高句麗王に昇格して冊命され，康の諡号を得ている。これ以外に455年から宋にも朝貢し，宋の世祖の孝武皇帝から463年に車騎大将軍・開府儀同三司に冊封されたり，南斉への朝貢により，南斉太祖の蕭道成から驃騎大将軍に冊封されたりしている記事が見らる，一方，475年には相変らずの百済との抗争で百済王の扶餘慶を殺害し，多くの捕虜を国内へつれ帰っているなど半島の百済，時には新羅の領土を荒らす戦いを行なっているのが見える。475年に殺害された百済の王は近蓋婁とも呼ばれる第二十一代の蓋鹵王であるが，「百済本紀」三蓋鹵王によると，この王は博奕が好きであった。これより先，高句麗の長寿王は，ひそかに百済を滅ぼそうとはかつて，百済を間諜出来る者を国内で求めたのである。この時，僧の道琳なるものが応募し，自分はもはや道を極めることは出来ないが，国恩に報いたいと考えている。自分を国王が使ってくれるならば，必ずや君命を辱しめない様な働きをすると申出でた。そこで，王は道琳をして百済をあざむかせることとして，罪を得て高句麗から逃れて来たと百済に入り込ませたのである。近蓋婁の博奕好きにつけ入るべく，道琳は王の宮殿の門前で，自分は碁が大変上手であるので王の側近にその事を伝える様にと云つた。王は道琳を宮中に召し入れ，碁の相手をさせたが，云う通り名手であったので王の上客となってしまう程に尊敬され，出会うことが遅すぎたのではと恨む程の仲になって行った。ある時，道琳は王に云った。自分が外国人であるのに王は疎外せず，手厚く扱って下さる事有難く思っているのであるが，その理由は一芸に秀でているというためであり，その他に少しも王の利益になる様なことをしていない。そこで，今益となるべき一言を申し上げたいと考えるが，王はどの様に考えるかと。王は話しをして見てくれることが先であり，その話しが国益につながるならば，それでその方も望む益となることを行なったこととなるのではないかと答えたのである。そこで道琳は次の様に云った。王

の支配する百済は，四方が全て山や丘，河や海に囲まれており，これこそ天が作った要害の地で，人の作った形ではない。それこそが四隣の国々が，あえておびやかそうとせず，ひたすら王に仕えることを願い，それ以外に横しまなことは考えないのです。王はまさに崇高の勢いと富貴の業を持っている。唯王は人の目をはゞかって，城郭は作らず，官殿は修理せず，先王の骸骨さえ露地に仮埋葬したまゝである。百姓の家屋もまた河に流されることしばしばであり，壊されていること多いので，この様なことは大王のとるべきことではないと考えているなどと云った。王はこの言葉に随い，百済人をすべて動員して土を盛りあげ，城を築いて，その中に宮殿・楼閣・高殿などを作ったが，いずれも壮大・華麗なものばかりであった。又大石を郁里河から取り，それで槨を作って父王の遺骨を葬った。又，河の堰提を築き，その長さは蛇城の東から崇山の北に及ぶ壮大なものを作り上げた。この結果，国の米倉は空となり，人民は窮之し，国家の基盤は大きくゆらぐ結果となったのである。ここで道琳は高句麗に逃げ帰り，長寿王に百済討伐を決心させた。長寿王の出兵を聞いて近蓋婁は子の文周王に云った。自分は愚かで，人を見る目がなく，姦人の言葉を信用して今の様な事態となった。今となっては民は傷つき易く，軍隊は弱体であり，危機となっても誰も自分の為に戦ってくれるという事はないであろう。自分は責任をとって戦って死のうと考えているが，息子の御前まで共に死ぬのも無益であるから難を逃れて，国王の系譜を継続させてくれと望む所であると頼んだ。そこで文周王は，木劦満致，祖彌桀取ととも南下して難を逃れたが，王は高句麗の将軍の桀婁と万年などにより殺害されるに至った。この再曾桀婁と古尓万年は，もと百済の国人であり罪を犯して高句麗へ逃げた者達であったと云はれる。又，木劦満致は，「日本書紀」巻10応神天皇25年（294-414）条に「大倭木満致」とある人物と同一人物であるとする説がある。さて，半島の人間像，ここまで如何に皆様に写り見えたことでしょうか。次考で高句麗滅亡までを眺めたいと考えている。